



平和ってなに？



～戦争を知って平和を考えよう～

7月12日は「宇都宮市平和の日」

7月12日～8月15日は「宇都宮市平和月間」です

宇都宮市立図書館

昭和20年7月12日深夜、第2次世界大戦の中、宇都宮に空襲がありました。宇都宮市では、平和を願い、この日を「宇都宮市平和の日」とし、7月12日から終戦日である8月15日までを「宇都宮市平和月間」と決めました。この期間中、図書館では、平和関連の本などを集めたコーナーを開設しています。あわせて、平和を考えるための図書のリストを作成しました。どうぞご利用ください。

<p>【凡例】 『本のタイトル』 著者 出版社 出版年 本を所蔵している図書館 中＝中央図書館 東＝東図書館 南＝南図書館 上＝上河内図書館 河＝河内図書館 () 内は本の分類番号 概要</p>	<p>『戦争が終わった日 栃木県民が語る八月十五日』 編集工房随想舎／編 随想舎 1989 中・東・南・河 (K200.7) 本書は、昭和21年8月15日の栃木県民の体験談である。空襲・食糧難・学童疎開・勤労働員そして、肉親・友人の出征・戦死など。戦争が遠く離れた時代や地域のものではないことと、平和の大切さを知る。</p>
<p>『うつのみやの空襲』 宇都宮市教育委員会／編 宇都宮市教育委員会 2001, 2011 全館 (K210.7) (213.2) 宇都宮市の「戦災記録保存事業」の報告書。近代の宇都宮の歴史から、戦後の平和への道のりまでを、多数の写真や資料、市民への聞き取り調査などでわかりやすく記録している。</p>	<p>『実録！宇都宮大空襲』 徳田浩淳／著 宇都宮平和祈念館をつくる会 1999 中・南 (K390) 当時市役所に勤務していた郷土史家の徳田浩淳氏が、宇都宮大空襲のあった7月12日から19日までの一週間を、自身と家族の体験を中心に克明に記録したもの。</p>
<p>『宇都宮空襲の記憶』 宇都宮市平和委員会／編 宇都宮市平和委員会 2005 中・東・南 (K390) (K950) 昭和20年7月12日に起きた宇都宮大空襲当日の記憶を中心に、市民が自身の戦争体験をつづった記録集。当時の宇都宮市で起きた、九つの貴重な体験が収録されている。</p>	<p>『二荒山は炎の中に』 宇都宮平和祈念館建設準備会／編 随想舎 1992 中・東・南・河 (K390) (090) 宇都宮空襲・戦災の実態を、多くの図版や写真、絵を使い、分かりやすく解説。市民による宇都宮空襲の切実な体験談を交え、身近なところから平和を考える1冊。</p>

<p>『疎開した四〇万冊の図書』 金高 謙二／著 幻戯書房 2013 中・東・南 (016.2) 第二次世界大戦中、図書館の蔵書を戦禍から守るため、旧都立日比谷図書館の蔵書約四〇万冊が1年がかりで疎開した。図書館員や近隣の高校生たちの手で、どのように本は疎開したのか。また、帝国図書館を含む全国の図書館の蔵書が疎開した様子や、戦後の図書館についても記された、史実に基づいたドキュメンタリー。</p>	<p>『戦争と子ども 20世紀の戦争』 共同通信社／写真 草の根出版会 2001 中・東・南 (209.7) 「第二次世界大戦の特徴の一つは、軍人の死者より民間人の死者が多かったことである。おおぜいの子どもが死んだり傷ついたりした…」(本文より) 写真でみる、戦時下の子どもたちの姿。</p>
<p>『戦争中の暮らしの記録』 暮らしの手帖社編集部／編 暮らしの手帖社 1972, 2010 中・東・南・河 (210.7) 戦争中に人々は何を食べ、何を着、どのように働き、また移動したか。物資の窮乏や男子の動員、迫り来る戦禍の中、どのように生活を続けていったか。普通の人たちの生の声と写真によって、戦争中の暮らしが身近などのように蘇える。</p>	<p>『娘と話すアウシュビッツってなに?』 アネット・ヴィヴィオルカ／著 山本規雄／訳 現代企画室 2004 中・南・河 (234) フランスの歴史学者である著者が、娘の質問に答える形式で、アウシュビッツがどのようなものだったか、ユダヤ人ジェノサイドがどう進行したかを説明する。</p>
<p>『戦争を知るための平和学入門』 高柳先男／著 筑摩書房 2000 中・東・南・河 (310) (319.8) 戦争や暴力がどういうメカニズムで起こるのかを解明し、平和への道筋を具体的に考える新しい学問「平和学」を、わかりやすくまとめた入門書。</p>	
<p>『ノーモアヒロシマ・ナガサキ』(英文併記) 黒古一夫／編 清水博義／編 James Dorsey／訳 日本図書センター 2005 中・東・南 (319.8) 被爆した広島・長崎の人々の様子や、街並の写真、被爆者の手による絵画作品など、原爆被害の悲惨さを伝える資料が収められている。本文は英文併記。</p>	<p>『ぼくは戦争は大きらい』 やなせ たかし／著 小学館クリエイティブ 2013 中・東・南・河 (319.8) やなせたかし氏が自らの従軍体験をつづった本。戦争のことを語ってこなかった氏が、未来を生きる世代に残したいと、亡くなる直前まで語った最後のメッセージ。</p>
	<p>『私が見た戦争』 石川文洋／著 新日本出版社 2009 中・東・南 (319.8) ベトナム、ラオス、カンボジア、ボスニア・ヘルツェゴビナ……。著者は報道カメラマンとして戦場に身を置き、写真を撮った。カメラを通して知る戦争の実態、悲惨さ、残虐性……。著者の悲しみ、怒り、切なさ、そして平和を希求する心が伝わってくる。</p>
<p>『原爆詩集八月』 合同出版編集部／編 合同出版 2008 中・東・南 (911.5) 戦争がその時代の人たちから何を奪ったのか、詩を通して戦争の残酷さ、平和の尊さを感じることができる。収録作品「生ましめんかなー原子爆弾秘話ー」、「コレガ人間ナノデス」、「慟哭」等。</p>	<p>『きけわだつみのこえ』 日本戦没学生記念会／編 岩波書店 1995 中・東・南 (915.6) 第二次世界大戦末期に戦没した日本の学徒兵の遺書を集めた遺稿集。学生たちは、死を前にしてなお学問への情熱を絶やさず、真理と真実を探求しようとした。平和と自由への痛切な希望を後世に託している。</p>



『アンネ・フランクの記憶』

小川洋子／著
角川書店 1995

中・東・南・河 (915.6)

作家への道を志すきっかけとなったアンネ・フランクの足跡を、作家小川洋子がたどる。旅の始まりは生家から。アンネ一家を支え続けたミーブさんなど、アンネに縁のある人々も登場する。

『ヒロシマ・ノート』

大江健三郎／著 岩波書店 1965
中・東・南・上 (916)

戦後 20 年を経て広島を訪れた著者が見た、消えることのない原爆の爪あと。死の宣告を受ける被爆者や病と闘う医師たちなどの、過酷でありながら威厳に満ちた姿が胸を打つ。被爆と核の恐怖を、時代を超えて訴える本である。

『昭和二十年夏、子供たちが見た日本』

梯久美子／著 角川書店 2011
中・東・南 (916)

子供の頃に終戦を迎えた著名人十人、角野栄子、児玉清、館野泉、中村メイコ、倉本聰、五木寛之らの証言集。太平洋戦争が始まったときの年齢は5歳から10歳だった十人が見た終戦、そして戦後の日本とは。

『原爆の子（上）・（下）』

長田新／編 岩波書店 1990, 2010
中・東・南 (916)

自らも広島で被爆した編者が平和教育のために編集した原爆体験手記。原爆によって被害を受けた少年少女1175名の手記から代表的なもの105篇を選んだ。広島の少年少女たちの、心に消えない傷痕をのこした原爆の恐ろしさを教えてくれる希有の記録である。

『ハロランの東京大空襲』

早乙女勝元／著 新日本出版社 2012
中・東・南 (916)

ハロランは元米軍のB29搭乗員で、1945年1月27日東京空襲中に日本軍戦闘機の攻撃を受け、神栖市付近に墜落し、日本軍の捕虜になった。3月10日東京大空襲の日を東京の憲兵隊本部の独房で迎え、終戦により本国へ帰還した。2000年から10年間の著者との交流からまとめたもの。

『沖縄戦「集団自決」を生きる』

森住卓／写真・文 高文研 2009
中・東・南 (916)

沖縄・慶良間諸島で起こったことを伝えたいと、フォトジャーナリストの著者が「集団自決」の生存者26名を取材。沖縄戦を象徴する悲劇に遭遇し、60年以上経過した今もその記憶に傷つき苦しんでいる人々が語る、風化させてはいけない過去の記録。



『長崎の鐘』

永井隆／著 日本ブックエース 2010
中・東・南 (916)

1946年脱稿、1949年初版発行。放射線医療の現場にいた著者が、科学者として、また、一市民の立場から、自ら体験した長崎の原爆投下を克明に描いた作品。

『黒い雨』

井伏鱒二／著 新潮社 2003
全館 (F)

原爆の激しさ、恐ろしさを声高に表現する作品が多い中、この作品は被爆者の日常をただ淡々と描いている。市井の人の上に冷たく降り注ぐ黒い雨。静かな光景が原爆の残酷さを際立たせ、平和の大切さを強く訴える。

『永遠の0』

百田尚樹／著 太田出版 2006
全館 (F)

百田尚樹の小説家デビュー作。実父の出生等からインスパイアされた作品で、文庫、コミック、映画と様々なメディアで注目されている。太平洋戦争で戦死した特攻隊員だった祖父の家族への想い、過酷で悲惨な戦場で、兵士がどう闘ってきたかもよくわかる作品。

『総員玉砕せよ！』

水木しげる／著 講談社 1995
中・東・南 (C)

戦争を一兵士の側から書いた記録は数多くとも、当時を体験した漫画家だからこそ描けることがある。敗色が濃厚な激戦地で、部隊は玉砕を命じられる。立派な人も愚かな人も登場し、戦場のリアルさ、無意味さを訴えかける。

■子ども向けの本



『なぜ戦争はよくないか』

アリス・ウォーカー／文
ステファノー・ヴィタール／絵
長田弘／訳 偕成社 2008
中・東・南・河 (E01 ウ)

色鮮やかな平和な世界に、戦争は音も立てず、静かにひそやかに近づいてくる…。豊かな色彩で彩られたページとは対照的に、不気味な戦争の影を感じさせる本。

『ちいちゃんのかげおくり』

あまんきみこ／作 上野紀子／絵
あかね書房 1982
全館 (E03 ア)
H23年度教科書 - 3年

「かげおくり」はちいちゃんのおとうさんが教えてくれた遊び。ちいちゃんは一人でかげおくりをしながら、家族が来るのを待っている。戦争はちいちゃんから家族を奪ってしまった。幼い少女の目から見た戦争の物語。

『宇都宮大空襲 一少女の記録』

小板橋武／絵・文 随想舎 2007
全館 (E03 コ) (K950)

昭和20年7月12日。恐れていた空襲がきた。夜中、アメリカ軍の飛行機がたくさん飛んできて、宇都宮に爆弾を落としていった。街は焼かれ、500人以上の人が犠牲になった。当時、中学1年生だった少女が体験した宇都宮大空襲の記録。

『かわいそうなぞう』

土家由岐雄／文 武部本一郎／絵 金の星社 1970
全館 (E03 ツ)

戦争が激しくなってきた東京。動物園では動物達が空襲によって逃げ出だして暴れないよう、殺さなくてはならなかった。3頭のぞうにもついにその時がきてしまった。健気に生きようとするぞう達と、決断をせまられた飼育員達の苦しみが伝わってくる。

『忘れないでください 宇都宮空襲の記憶』

小林新子／文 相原千草／絵 随想舎 2008
全館 (K950) (090)

著者が中学1年生のときに体験した宇都宮空襲と、戦後の暮らしについて書いた本。私たちの住む宇都宮で、戦争はどんな爪あとを残したのか。もう二度と戦争を起こさないために、今ある平和な暮らしを見つめるために、小林さんの記憶にふれてみよう。

『さがしています』

アーサー・ビナード／作 岡倉禎志／写真
童心社 2012
中・東・南・河 (E01 ビ)

「おはよう」「いただきます」「いってきます」普通の日常が、あの日、一瞬でなくなってしまった。残されたものたちがあの日常の続きを今も探している。残されたものたちが日常から引き裂かれる痛みや悔しさ、寂しさを、静かな言葉で語る写真絵本。

『一つの花』

今西祐行／文 鈴木義治／絵 ポプラ社 1975
全館 (E03 イ)

食物が不足していた戦争中、いつもおなかをすかせていた幼いゆみこの口ぐせは「一つだけちょうだい」だった。ある日、ゆみこのお父さんも戦争に行くことになった。出発するお父さんが、最後にゆみこにくれたのは、一りんのコスモスの花だった。

『せかいいちうつくしいぼくの村』

小林豊／作・絵 ポプラ社 1995
全館 (E03 コ)

H23年度教科書 - 4年
アフガニスタンの村、パグマン。平和だった国で内戦が始まってからも、パグマンでは春には草花が咲き乱れ、夏には果物が実り、人々はこの村で平和に暮らしていた。戦争の中でも力強く生きる人々とうつくしい村を描いた絵本。

『ひろしまのピカ』

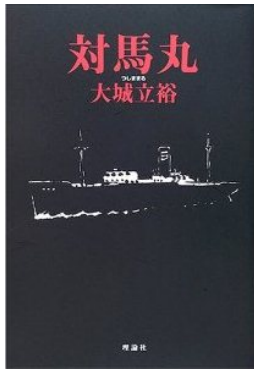
丸木俊／文・絵 小峰書店 1980
全館 (E03 マ)

広島に原爆が投下されたのは、1945年8月6日午前8時15分のことだった。みいちゃんは、お父さん、お母さんと一緒に朝ごはんを食べていた。その時、それは突然やってきた。すさまじい光がつきぬけたかと思うと、何もかもが地獄絵のように変わってしまった。



<p>『3万冊の本を救ったアリーヤさんの大作戦』 マーク・アラン・スタマティー／作 徳永里砂／訳 国書刊行会 2012 中・東・南・河 (010) 戦火に侵されるイラクの街で、図書館の本を救わなくてはと奮闘する司書のアリーヤさん。たった数日で彼女は3万冊もの本をどのように救ったのだろうか。 2003年イラク戦争時、本当にあった話。</p>	<p>『絵で読む広島原爆』 那須正幹／著 西村繁男／絵 福音館書店 1995 全館 (210) 広島に落とされた原爆を、時間を追って、上空から見た絵で克明に再現した絵本。大きな町を一瞬でなぎたおした爆発のすさまじさがわかる。絵は、服装や建物を当時の住民に聞き、忠実に描かれている。原爆がどのように作られ、どうして広島に落とされたのかについても、図や年表で詳しく説明されている。</p>
<p>『平和の種をまく』 大塚敦子／写真・文 岩崎書店 2006 全館 (300) (319) ボスニアには、民族のちがう人たちが一緒に働いている畑がある。戦争でばらばらになってしまった人たちはこの畑で助けあい、平和な生活を取り戻そうとしている。</p>	 
<p>『13歳からの平和教室』 浅井基文／著 かもがわ出版 2010 中・東・南 (310) おじいちゃん、孫のはるき、はるきの友達のミクの、3人の会話形式で書かれている。 戦争や平和のほかに、「人間としてふさわしい生き方をする」「21世紀の国際社会がすべきこと」など色々なテーマが出ている。</p>	<p>『平和と戦争の絵本』(全6巻) 石山久男／編 大月書店 2002 中・東・南 (310) 1巻目は、「人はなぜ争うの?」というテーマで書かれている。 争いを解決するには、争っている人達ではなく、第三者にしかできないこともある。教室の中でも、民族と民族のあいだでも同じなんだ。</p>
	<p>『なぜ世界には戦争があるんだろう。どうして人はあんなに争うの?』 ミリアム・ルヴォー・ダロンヌ／文 ジョシェン・ギャルネール／絵 伏見操／訳 岩崎書店 2011 中・東・南・河 (310) 大昔の人たちも戦争したのかな。戦争はなぜ起こるんだろう。戦争って何だろう。なぜ人間は戦争をするんだろう。様々な質問から「戦争」についての考え方を知ることができる1冊。</p>
<p>『ガラスのうさぎ』 高木敏子／作 金の星社 2000 全館 (913) H24年度教科書 - 中学1年 12歳の敏子は、東京大空襲で母と妹2人を亡くしてしまった。さらに目の前で、父を機銃掃射によって亡くし、たった1人で父を火葬する敏子…。どこまでも続く暗闇のような戦中戦後の中を、けなげに生きていく少女の体験記。</p>	<p>『ひめゆりの少女たち』 那須田稔／著 偕成社 1977 中・東・南 (913) 太平洋戦争中、沖縄戦で散っていった女生徒隊「ひめゆり部隊」の少女達の話。 この戦争で、十代の少年少女が銃をとり、最前線の看護婦として兵士とともに戦った実話が書かれている。</p>

<p>『ふたりのイーダ』 松谷みよ子／著 司修／絵 講談社 2006 中・東・南 (913) 直樹と妹のゆう子の兄妹は、お母さんの田舎で、誰かを求めて歩きまわる小さな椅子と出会った。この椅子のことを直樹が調べていくと、イーダという女の子を探していること、悲しい事件があったということがわかってくる。</p>	<p>『私のアンネ＝フランク』 松谷みよ子／著 偕成社 1979 中・東・南・河 (913) 「アンネの日記」をきっかけに、ゆう子はアンネにあてた日記を書きはじめる。次第にゆう子は、アンネに向けられた「いわれなきにくしみ」の意味を知ることになる。</p>
---	---



<p>『対馬丸』 大城立裕／作 嘉陽安男／作 船越義彰／作 理論社 2005 中・東・南 (916) 昭和19年(1944年)8月22日。沖縄から本土に向かった学童疎開船「対馬丸」は、アメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け、深夜の海に沈んだ。乗船者1661名、うち学童800余名。生き残った学童はわずか59名。疎開史上、最大の悲劇である対馬丸事件の全貌を伝えるノンフィクション。</p>

<p>『禎子の千羽鶴』 佐々木雅弘／著 学研パブリッシング 2013 中・東・南・河 (916) 2歳のとき広島で原爆にあい、10年後に原爆症を発症した少女・佐々木禎子さん。12歳で亡くなるまで、明るくふるまいながら回復を信じて千羽鶴を折り続けた。「原爆の子の像」のモデルとなった禎子さんの実の兄が書いた、禎子さんと家族の物語。</p>
--

<p>『地雷のあしあと ポスニア・ヘルツェゴビナの子どもたちの叫び』(英文併記) こやま峰子／詩 ポスニア・ヘルツェゴビナの子どもたち／絵 小学館 2003 中・東・南 (936) ボスニアの内戦が終わっても、ボスニアの全土には75万個以上の地雷が残っている。いまだに地雷で傷つく子どもたちがあつと絶えない。ボスニアの子どもたちが描いた絵を中心に作られた絵本。</p>
--

<p>『ハンナのかばん アウシュビッツからのメッセージ』 カレン・レビン／著 石岡史子／訳 ポプラ社 2002 全館 (936) 広島県福山市のホロコースト教育資料センターに展示されている、古びた茶色いカバン。カバンの持ち主はアウシュビッツのガス室で13年の生涯を終えた、ユダヤ人のハンナ。半世紀後の日本でハンナのカバンとであつたふみ子は、ハンナがどんな少女だったのか、ハンナを探す旅を始める。</p>



発行 平成26年7月
編集・発行
宇都宮市立中央図書館
〒320-0845 宇都宮市明保野町7-57
電話 028-636-0231